

# (ALS患者囑託殺人事件が問うもの：下) わたしたちが生きる意味とは 清水哲郎さん・ドリアン助川さん

会員記事

2020年9月9日 5時00分

シェア

ツイート

ブックマーク

スクラップ

メール

印刷

[list](#)

0



清水哲郎さん

体が不自由であっても、なくても、「生きる意味」を見失いそうになることは誰しもあり得ます。生きる意味とは、それを受け入れる社会とは。命について考える2人に聞きました。

■「切り捨てない」を実現する一員 岩手保健医療大学長・清水哲郎さん（73）

「死にたい」。今回の事件のように、そう言う人がいたら、そのまま死なせますか。



報道の限りでは、起訴された医師たちは、本人が生きる道を考えず、ただ死への道を肯定し推し進めたようです。「身の回りの世話をしてもらおうようになったら、死を選ぶのはもっともだ」という価値観の人は、医療・ケアの従事者には不適格です。現在の日本社会が認める価値観から外れているからです。

厚生労働省の研究班に参加した縁で、ALS（筋萎縮性側索硬化症）患者の人たちと20年来の交流をしています。ある方は人工呼吸器を着けて30年ほど、国内外の患者や医療・ケア従事者と交流し、行政を動かしたこともあります。

難病の人も社会の一員として生き続けることで、社会の役に立っています。この社会を現に、誰一人として切り捨てない社会にするからです。「色々できなくなったら、死にたいのは無理ないよ」と妙に同情的な価値観が支配的になれば、今は元気な人も、老いて色々できなくなれば切り捨てられる不安を抱くでしょう。

難病でも、年老いても一緒にこの社会の仲間として生きていこう。私が保ちたい、この価値観は、不十分ながらも制度として実体化されています。公的医療保険や介護保険、障害者向けの介護サービスだってそうです。生きていようと思えるためには、社会という環境が重要なのです。

一方で、私はどんな状況下でも、生命を延ばせるだけ延ばすのが良いとは考えていません。

例えば人生の最終段階では、無理に生命維持をしない方が心身の負担を和らげ、本人らしい最期を迎えられる場合があります。医療現場では胃ろうや透析、点滴などを差し控えたり、終了したりします。あくまでも医学的判断をベースに本人の人生理解や価値観に基づき、本人の最善を考え、本人を中心に関係者が合意した選択であるべきです。本人と関係者の間で合意に至らない場合では、本人の明確で、持続的な意思に反する生命維持の強行はできません。

